九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アートシェアリングにおける'art as therapy'発生の構造原理 : 芸術体験はいかにセラピューティックとなりえるか

石田, 陽介

https://hdl.handle.net/2324/1441327

出版情報：九州大学, 2013, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式３）

氏　　名　：石田陽介

論文題名　：　アートシェアリングにおける‘art as therapy’発生の構造原理
－　芸術体験はいかにセラピューティックとなりえるか　－

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

芸術体験は、人に何をもたらしえるのであろうか。芸術は古来より人の精神を癒す作用があることが知られていたが、これを近代科学の元でリハビリテーション治療へと応用する手法がアートセラピー（芸術療法）である。アートセラピーの起源には、芸術体験と心理療法という二つの潮流がある。ひとつは芸術体験そのものが持つ癒しの力に論拠をおく‘art as therapy’であり、もうひとつは、芸術を手法として活用する心理療法‘art psychotherapy’である。しかしその先行研究を振り返れば、芸術療法の理論とは、精神医学や臨床心理学の領域における‘art psychotherapy’についての論及の歴史であった。近年、‘art as therapy’の理論解明の必要性が芸術療法論において示唆され、その究明が急がれている。

そこに迫るキーワードとして本論では、‘アートシェアリング’を掲げる。絵画療法における「シェアリング」とは、患者が描画を行った後、言語的コミュニケーションを交えながら作品に表した思いを治療者へと伝え、共にそのイメージを分かち合う過程を指す呼称である。そうした絵画療法の一過程を示す「シェアリング」という呼称に対し、本論では広義の意味において芸術共有体験の全ての過程を‘アートシェアリング’と規定し、対象化する。

第１章では、‘art as therapy’を巡るパイオニアの先行研究を手繰り、これまで人類がいかに芸術体験を自らの精神衛生の向上の術として実践し検証してきたのかを俯瞰し、精神医学と芸術学、双方のアートセラピーを巡る学術的課題を模索した。その結果、これまでのアートセラピーを巡る学術研究は、精神医学や臨床心理学の領域における‘art psychotherapy’についての議論であり、これからの目指すべき課題として、‘art as therapy’の芸術療法論における解明が必要性であることを明らかにした。

次に第２章では、人が芸術体験を行なえばいかなる状況下においても癒しの効果を発起するものではないことを指し示す事例としてアートコンプレックスの発症を挙げ、芸術体験においてその精神的治癒効果を分ける差異がどこに起因するのか、対象関係論を援用し様々な芸術体験場面における構造モデルを通した比較分析を行い、‘art as therapy’の起動する芸術体験構造を探った。結果として、‘art as therapy’の起動する１人称芸術体験へと移行展開を促す２人称芸術体験の構造原理が明らかになった一方で、被験者に客観的作品評価姿勢をとることはアートコンプレックス発生を誘発する起因を構造的に備えた３人称芸術体験をもたらし、２人称芸術体験と心理的効果の違いを生み出すことが明らにした。

さらに第３章では、精神科リハビリテーション治療における‘art psychotherapy’を通した‘art as therapy’の実際を考察し、その構造を探求した。その結果、精神科リハビリテーション治療における‘art psychotherapy’とは、患者自身がセルフ・アートシェアリングの体験を重ねることで‘art

as therapy’を受け取るという芸術養生の仕組みを精神科治療として構造化した臨床技法であること、そして絵画療法セッションの構造は通過儀礼の構造原理と重なっており、どちらとも体験者が自律性を揺り戻しながら、自己と世界との関係を深く結わえ直すリハビリテーション機能を発揮させることを明らかにした。

第４章では、３つのワークショッププログラムを事例として挙げながら、アートシェアリングを意図する芸術体験ワークショップの実際を観察し、芸術体験において如何に‘art as therapy’が起立するのか、その構造の分析を行なった。その結果、母子という関係性を規範として構築化される２人称芸術体験の持つ対称性アートシェアリングの構造が、作品やテキストといった客観的事物を介したイメージの分ちあいを通して、互いの自律性を促進させながら双方のあいだに成立する間主観性を共創し、それを共有する過程を通して、セラピューティックな場を起立させる構造原理が明らかになり、ここではそれを「対称性アートシェアリングの原理」と称した。

そして第５章では、九州大学のある箱崎地区で筆者自身の行った５年間のアクションリサーチにおいて、「対称性アートシェアリングの原理」をセラピューティックな地域創造の術として活用できないか、新たなるコミュニティアートのアプローチを試行した事例を分析した。そこでは、他者との関わりで育まれるもの「learning2.0」であるアートシェアリングが、さらに特定の対象に向けた情熱によって深められる劇場型の学び「learning3.0」のコミュニティアートへと発展する新たな社会教育活動が、ソーシャル・アートセラピーの活動として位置づけられる事が明らかになった。

最終章となる第６章では、本論文の総括として‘art as therapy’を発生させる対称性アートシェアリングの構造原理がさし示す、今日における芸術体験の可能性を明らかにした。アートシェアリングは、‘私’と‘あなた’との共創体験を通して、双方の内部生命の相互浸透を起こしていく営みである。自己と他者とを分け隔てる様々な障害を溶かし、双方に拓かれた共有地である汽水域をつくりえる存在として対称性アートシェアリングを捉えながら、ケアに根ざしたセラピューティックな地域文化創造への可能性を２人称芸術体験は湛えており、今後、アートセラピーを新たな予防医療として地域教育活動と結わえ直した新たな形で広く市民へと提供することの課題が示唆された。